

各 位

はじめまして。ドキュメンタリー映画「弁当の日」の監督を務めました安武と申します。この度、映画の資料を送らせていただくにあたり、自己紹介と映画化の経緯について、簡潔にご説明させていただきます。

1963年9月11日生まれ、福岡県宮若市出身。1988年に西日本新聞社に入社。企画事業部、久留米総局、宗像支局、出版部、編集委員などを経て、2020年3月末に同社を定年前に退職。映画製作は編集委員時代に縁があって引き受け、今日に至ります。

「弁当の日」の取り組みは、14年前に本紙連載「食卓の向こう側」を読んで知りました。当時、私は出版部に所属。連載を担当した記者から、「弁当の日」提唱者の竹下和男先生を紹介され、その後、竹下先生の著書「泣きみそ校長と弁当の日」の編集に携わりました。

2008年7月、7年間連れ添った妻を乳がんで亡くしました。その4年後に妻と娘との暮らしを綴ったノンフィクション「はなちゃんのみそ汁」(文藝春秋)を刊行。

2015年、本は映画化され、取材が相次ぎました。私が著書で伝えたかったのは、余命を覚悟した妻が娘に何を遺そうとしたか、です。妻は当時4歳だった娘に包丁を持たせ、みそ汁づくりを教えていました。メディアに取り上げられると、小学校の教材に活用されるなど大きな反響がありました。しかし、妻の子育てに共感の輪が広がる一方、残念な出来事もありました。妻が娘にみそ汁づくりを教えたことに「虐待だ」などと中傷の書き込みがネット上に拡散。罪のない娘までが、学校でいじめに遭う羽目になったのです。

竹下先生は、妻が娘にみそ汁作りを教えたエピソードを自身の講演で紹介しています。

聞くと「弁当の日の意義をこれほど端的に説明してくれる実話は他にはない」と答えてくれます。結果、多くの学校が「弁当の日」を導入。全国の都道府県で2300校が実践しています。

子どもを台所に立たせることに批判的な人たちに、「弁当の日」の本質を知ってほしい。それは妻が娘にみそ汁づくりを教えた意味を理解してもらうことにもつながるように思えるからです。ただ、当事者の私自身よりも第三者に語ってもらった方が良い。以前から、そう考えていた私は、映画製作の打診があった時、監督を引き受けようと決めたのです。

竹下先生は子どもたちに弁当の作り方だけを教えようとしているわけではありません。「変えるべきは、子どもではない。子どもを取り巻く環境だ」と訴えます。今回の映画では、弁当作りに取り組む子どもたちだけではなく、「弁当の日」の本質を理解し、世直しに奔走している大人たちにも出演してもらいました。

「弁当の日」はシンプルな挑戦の中に「食」の意味を考え、その先で「命」と向き合う奥の深い仕掛けでもあります。映画を見て「なるほど、そういうことか」と感じていただけたら幸いです。

2020年8月20日

映画「弁当の日」監督 安武信吾